



届け！顧問の熱い思い



「立つんだ、立つんだジョー！」この言葉は、ノックダウン寸前のボクサーに対して、指導者がリングサイドから叫ぶ有名な漫画の一コマです。スポーツを気合いや根性などの精神論で語ることが多かった時代は、苦難に耐えることや指導者へ忠義を尽くす事が美化されていました。

私も過去においては、部活動の指導で「何をやっているんだ！」「こら！やる気があるのか！」と、つつい語気を荒げて指導することが多く、熱血、体育会系などと揶揄されました。

今考えると、学生時代、一心不乱でスポーツに打ち込み体得したエネルギーではありましたが勝利を導く適切な指示ではなかったと痛感しております。

昭和の時代に正しいと信じ込まれていたスポーツの常識は、今では大きく変わりました。運動系部活動においても、顧問やコーチのアドバイスを覚えていくだけではなく、指導されたことや経験したことを批判的（クリティカル）に思考していく力が常に求められています。

例えば、練習での成果が出せずに負けてしまった時でも、「もう何をやっても無理なのかな」と否定的な捉え方では、勝てない理由を冷静に考えることができません。トライ&エラーを繰り返す中で失敗から学ぶためにも、今のチームはどうなっているのか自分たちに足りないのは何だろうか、と現状を批判的（クリティカル）に考えることが大切になります。

特に、試合展開が接戦になればなるほど、その力が求められます。指導されたことを生かしたゲーム展開とするにはどうすべきか、経験や直感に頼っていれば、何かがおかしいと感じたまま臨んでいる状況となり、冷静な判断もできません。今起きていることに対し、矛盾点やリスクを回避するために選手一人一人が自分の動きを客観視する思考（クリティカル・シンキング）が勝敗を左右すると言えるでしょう。

過去を振り返れば、パワーや技術を高めることばかりに目を向けていた私の顧問経験も、生徒の可能性を引き出せずに終わってしまったと感じずにはられません。

令和6年4月、各部活動の公式戦が始まりました。日頃の練習成果を発揮する機会でもあり、勝利に向けて仲間を信じ、全力で臨む生徒の姿がとても頼もしく見えます。

ある日、私は、ハンドボールの試合を観戦に行き、駆けつけた保護者と一緒に応援しました。会場では、顧問が生徒を鼓舞する声が聞こえてきます。鬼のような形相で「気合いだ！」「もっと声を出せ！」といった精神論的な言葉は一切聞こえてきません。それぞれの選手が自らを客観視できるように声をかけ、全体の流れを把握させようと努力しています。状況に応じて最適な戦略を導き出す顧問の思いが届くと、パスがつながり点数を重ねていきます。相手のシュートもキーパーの的確な判断力で得点を阻止します。クリティカルな思考で展開されたゲームの流れは、見事なまでにチーム力を発揮させているように見えました。



「よし、そうだ！行け！」生徒の背中を後押しする思いと「どうする！それでいいのかわか？」語気は強くとも「考えろ！考えろ！」と常に冷静さを失わないように、今すべきことは何かを問いかける顧問の熱い思いは、きっと学びの匂いとなって生徒の心へ届いていたに違いありません。